

リスタート (再始動)・ニューヨーク

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井 陽一 Yoichi Fukui

ニューヨークの街には少しずつ以前のような活気が戻ってきている。文化協会周辺のレストランには若い人たちが集い、笑い声や楽しそうな団欒があちこちで見られるようになってきた。ワクチンの普及が好奏したのか、感染率も急速に低下傾向にあり、そんな状況のなか、各地で新しい取り組みが始まっている。マンハッタンにある総合芸術施設リンカーンセンターでは、中央広場が緑あふれる緑地「グリーン (The Green)」として生まれ変わる。屋外舞台として利用されるとともに市民がリラックスできる場を提供する。ニューヨーク市では7月1日には街を完全にノーマルに戻すと市長が宣言し、通常の10倍の予算を投じ「NYC リアウエイクンズ (目覚め)」との名の下に観光、文化、レストランなどの復活を支援するキャンペーンが発表され、街は再始動、盛り上がりつつある。

和コンサートシリーズ

そんな中、4月25日、文化協会が共催する「和コンサートシリーズ」が再開し、文化協会での演奏がライブストリームで放映された。このシリーズを主宰するの



チャールズ・ナイディック・大島文子夫妻

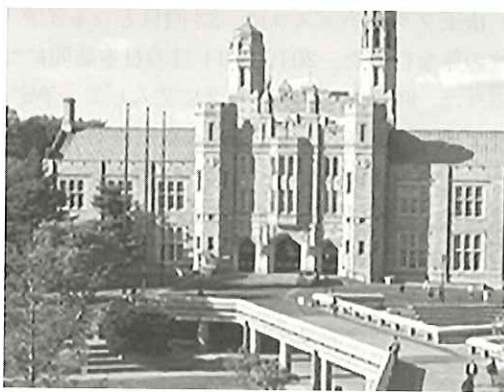
は、チャールズ・ナイディックさん。彼は『ニューヨーカー』誌において「クラリネットの達人であり、もはやクラリネット奏者の域を超えている」と評されるように、最も魅力的な音楽家の巨匠の一人として世界的に認められている。妻の大島文子さんもクラリネット奏者で、ジュリアード音楽院などで講師をつとめるアメリカで高く評価されている演奏家である。その夫妻が、この文化協会での和シリーズを企画してくれている。

私は、どうしてこれほど世界的に有名な演奏家が、夫婦そろって文化協会の活動に協力されるのか不思議だった。きっかけは、文化協会の活動の普段からの支援者である近所に住む日本人の女性社長さんの紹介であった。しかし、いろいろと話を聞いて後から知ったのは、大島さんはニューヨークでとても熱心に天理教を信仰しながら歯科医院を開業していた、大石昭子さんの姪だった。昭子さんは文化協会が設立される頃、50代の若さで急に出直されたが、30年の時間を経て昭子さんの御霊がナイディック夫妻を文化協会に繋げてくれたのかもしれないと、不思議な縁を感じている。夫妻の文化協会での活躍は、昭子さんもぎっと喜ばれているに違いないと思う。

ニューヨーク市立大学リーマン校との協定

今年のもう一つの楽しみは、ニューヨーク市立大学リーマン校と天理大学の協定が締結され、9月から交換留学が始まることだ。ニューヨークでは初めての天理大学協定校になる。

ニューヨーク市立大学は、11校の4年制大学と6校のコミュニティカレッジ、4校の専門大学院とによって構成されてい



リーマンカレッジ

る全米でも有数の大学群である。リーマン校はニューヨーク市ブロンクスにある4年制大学で、一般にはリーマンカレッジと呼ばれている。国際連合が誕生した1945年に、その本部が置かれた場所としても知られている。日本語教育も熱心に行われており、年に一度開催される日本語能力試験ではニューヨークで唯一の会場に指定されている。広大なキャンパスの中に新旧入り混じった様々な建築スタイルの建物が点在している。

ニューヨーク市内にある大学と協定を結ぶために、いろいろな大学を訪問したり交渉したり文化協会も協力したが、ニューヨーク市の公立大学ということもあり、様々な段階の手続きを経てようやく実現することになった。

キャンパスの中にはメキシコ政府から贈られたオルメカ文明の象徴となっている巨大な顔像のレプリカが飾られている。この巨大な顔像は天理大学附属天理参考館にも飾られているので、不思議な縁を感じ



キャンパスに飾られているオルメカ文明の巨大顔像

る。天理大学からの交換留学が成功し、学生たちがここで世界を知り視野を広げ国際感覚を養う貴重な場として発展してもらいたいと願っている。

文化協会の活動を通して不思議なことを数多く体験した。「不思議は神の働き」と聞いているが、あちらこちらで神様が働かれているように感じている。

文化協会30周年の旬に「感謝と挑戦—米国ニューヨーク世界たすけの道」という30周年記念ビデオを作成し、4月18日教祖誕生祭の日にお供えした。コロナウイルスというパンデミックを乗り越え、新しい時代を迎えようとしているこの旬、30周年を迎えた喜びと感謝の心でニューヨーク管内が一つに纏まって、まずは6年後2027年に迎えるニューヨークセンター創立50周年に向けて、勇んでリスタートしようとしているところである。